

漆塗りの櫛

むきばんだやよい塾 塾長 藤田憲司

縄文時代にはじまる櫛

私的な話が続いて恐縮だが、残された時間を意識してあらためて日本列島の文化の変遷を旧石器時代から勉強しなおしている。いまは縄文時代の列島諸地域の文化の多様性、異質性と共通性、極地的分布と広域部分布の意味合いを考えている最中だ。

考古学は日進月歩、現在の縄文時代観は大学時代までに学んでいた時代観とおよそかけ離れた文化段階に達していたことから始まる。これまでの縄文時代観は、未発達な狩猟採集社会という視点で片づけていた過去の想念に過ぎない。

縄文時代を勉強し直して気付いたのは、土器文化や埋葬文化・祭祀文化の違いが地域と時期（草創・早・前・中・後・晩期の）によって重複しながら変容している様子と広範に繋がっているものがあることだ。そのことは先学の指摘に学んだつもりだったが、漆塗り製品の多様さと出土例の多さに驚いている。

日本列島で漆を扱った最初期は遅くとも縄文前期まで遡るようだ。漆製品の古い例は若狭から北の日本海側にあり、時期の違いはあるが、北海道から九州まで各地の遺跡で出土している。漆塗り製品には木製櫛と木製容器、土器、飾弓、籃胎漆器などがある。あくまで漆製品が残る地質条件が整った場所で出土した遺物という前提で、ほかの地域になかったということではない。

漆塗りの櫛

漆塗りの始まりが縄文時代前期まで遡ることや、金属器のない世界で削り抜きの木製容器を造った技術力に対する驚きもあったが、漆塗り製品に朱色が多用されていることにも注目したい。その顔料について、縄文時代後期の東京都下宅部遺跡ですでに水銀朱が用いられていたことも驚きだった。なかでもわたしの戸惑いの一つが漆塗りの櫛だった。

縄文時代の漆塗り製品の多くは日常什器に通じる容器だが、櫛は明確な遺構＝墓に伴っている希少例である。北海道縄文時代後期のカリンバ遺跡では2体・4体・5体が合葬された墓があり、漆塗りの櫛と腰飾などが出土している。各墓壙の中の少なくとも一人は、3個以上の櫛をさしている。カリンバ遺跡の被葬者は、女性のシャーマンと考えられている。ただの櫛ではないと思うものの、墓から出土した漆塗りの櫛は、装飾品なのかシャーマン必須の道具（副葬品）なのか。墓から出土していない櫛や、下宅部出土の漆塗り簪をどう考えてよいのか。わたしは、そこで思考停止になっていた。

漆塗り櫛の出土例は、九州と四国を除く各地におよび、米子市井手勝遺跡でも後期ないし晩期の櫛が出土している。出土密度の違いは先に記したように、有機遺物の保存環境も関係しているだろう。それでも、弥生時代以降の漆塗り櫛の出土数だけでみると、縄文時代が最多かも知れない。

思いつかなかっ切り口

いつものことながら、深澤さんの切り口に感服した。レジュメの漆塗りの櫛の図を拝見したとき、縄文時代の櫛と弥生時代の櫛の話かと思っていたが、現代につながる櫛文化の展開になるとは、まったく予想できなかった。

深澤さんによると、弥生時代の櫛は縄文時代から継承した縦櫛のようだ。櫛について無関心・無知だったことはさきに記したとおりだが、漆塗り赤色の色合いが、水銀朱の場合は、~~その~~その粒度の違いによって異なるということも、初めて知った。縄文時代に水銀朱が用いられていた下宅部遺跡出土遺物の意味の重さを失念したのではなく、赤（だけでなく）の顔料の意味合いをわかっていなかった。

徳島県で水銀朱の採掘に関連する弥生時代の遺跡の報道があったのは、確か今年のことだったと記憶する。どのような経緯なのかわからないが、日本列島では縄文時代から水銀朱を扱っていた集団がいたようだ。朱であれベンガラであれ、赤色へのこだわりは縄文時代からあった。どのような意味合いで赤が重用されたのか、思わず主題と関係ない雑念を抱いてしまった。

それはともかく、櫛の歴史として縦（長の）櫛から横（長の）櫛への変化が前方後円墳の時代にあり、縦櫛と横櫛に格差があったという最近の研究成果も紹介して頂いた。櫛はただの装飾品ではなかった。かといって、弥生時代や前方後円墳の時代のいわゆる威信財でもない。深澤さんは、櫛が毛虱をとる効果もあったと紹介しつつも、普段の生活で用いられる道具や飾り物でなかったことを、思いがけない方法で示してくれた。

おもに貴族の日常世界を描いた平安時代の絵巻の女性の長い髪に櫛がまったく描かれていないとのこと。つまり、この時代では櫛は単なる装飾品ではなく、非日常的な場で用いられた道具ではなく、特定の儀式の場で用いられていたらしい。

その櫛の用途が大きく変化したことを江戸時代の浮世絵で示した。浮世絵に描かれた女性には櫛や簪が描かれている。櫛が日常生活の場で髪飾りとして用いられたことを示す確かな証拠であろう。氏の解は説得力にあふれていた。

現代の櫛はどうだろう。洗面所にわたし用の櫛はあるが、飾り物ではなく整髪の一つの道具にすぎない。女性が用いるときも、特別に和装で用いる場合を除くと、整髪用具に過ぎないのではないかな。時の流れとともに櫛の意味が変化したことを実感した。